Wilson HQ 1104 J74+
Apr. 21 1888 no. 106

廿一年四月（版權所有）廿一日發兌

THE WOMAN'S MAGAZINE.

女學雜誌

東京女學雜誌社

一冊五錢 府內無稅 郵稅一錢 每土曜出版

第百六號

社說
理想之佳人（第三）
宜からぬ女原
論說
小兒の精神及其保護法（榊叔）○日本婦人の地位（件直之助）
叢話
ウ井ラード孃の書簡○細君と家婢○古今女風の比較（鈴木弘恭）○わがつま
小說
都鳥○小說神髓
佳傳
ワルウイツク女の金言
寄書
佐々木家壽子の傳○○詩二首（川上柳外）○○文苑（鈴木弘恭）
小供の話
忠義なる丈治
新報
東京婦人矯風會雜誌と反省會雜誌○大日本風俗改良會誌其外十件
海外女報
女職工寄宿舍外一件

東曹二〇、三一、一一五 詳和堂中川昇刻

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 106, April 21st, 1888.

EDITORIAL:— Ideal Belle: No. III. Belles who are not Praiseworthy.

LEADING ARTICLES:— Child's Brain and How to Protect it, by Prof. S. Sakaki. (Concluded).; Position of women, by Mr. N. Ban.

MISCELLANIES:— Of Japanese Women Ancient and Modern, by Mr. H. Sudsuki; The Mistress and the Maid; A Letter from Miss Willard; The Farmer and His wife.

CRITICAL NOTES:— "Namida no Tani" ("The Valley of Tears"); Tama-Arare Mado no Kosasa" ("Japanese Words Analyzed").

NOVELS:— "Miyakodori"; Bunguet of Novels.

BIOGRAPHIES:— Lady Walwick.

CHILDREN'S COLUMN:— A Faithful Servant.

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

前號(第百五號)目次

●社説　理想の佳人(第二)詩人小説家の佳人

●論説　小兒の精神及其保護法(榊俶)○日本婦人の地位(伴直之助)

●批評　雛黃鸝

●叢話　善良なる母を造るの説(中村正直)○櫻花は爛熳たり○婦女に限るもの○百人一首一口話○古ばなし(高橋愚)○農夫吟

●小説　都鳥○小説神髓

●佳傳　ガルトン夫人

●寄書　宮川德子の傳◉文苑(鈴木弘恭撰)

●小供の話　小娘とヒキガヘル

●新報　花の薔薇戀の咲分○女學校○試驗及休業○日本婦人の洋裝其外二十件

●珊瑚之珠　(第六十二回)

東洋の美人

態濃意遠淑且眞。肌理細膩骨肉勻　(杜甫)

明眸皓齒今何在

蛾眉曼臉傾城國。鳴環動佩新相識　(劉方平)

絶代有佳人。幽居在空谷。自云良家子。零落依艸木。關中昔喪敗。兄弟遭殺戮。官商何足論。不得收骨肉。世情衷哀歇。万事隨轉燭。夫婿輕薄兒。新人美如玉。合昏尚知時。鴛鴦不獨宿。但兒新人笑。那國舊人哭。在山泉水清。出山泉水濁。侍婢賣珠廻。牽蘿補茅屋。摘花不插髮。采柏動盈掬。天寒翠袖薄。日暮倚脩竹。　佳人(杜子美)

驪姫者國色也　(戰國策)

青蛾皓齒在樓船

北方有佳人。絶世而獨立。一顧傾人城。再顧傾人國。寧知傾城與傾國。佳人再難得　(李延年)

漢の武帝の宮人麗娟(リケン)年始めて十四なり玉の膚軟(ウルホ)かに澤て氣香しくして蘭蕙よりも勝たり羅綺にだも勝ざる形常に瓔珞(ヨウラク)を掛ることを好まず袂を拂ふ時其躰に痕の付く可きを恐れてなり

年初めて十七容貌美しく遠山に眉芙蓉の臉肌は凝脂の如し

明眸皓齒閉月羞花の容姿

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第百六號　明治二十一年四月廿一日發兌

社說

○理想之佳人（第三）。　宜しからぬ女原、

吾人つらく、今の小說家の戲作稗史を見、上みは精妙なる浮雲より、下もは猥褻なる或る小新聞の作り物に至るまで、仔細に之を吟味して、時に悚然として懼れ、又憮然として長歎するとあり。嗚呼、吾人は、窈窕たる東洋の淑女を驅つて、後來果して、如此き佳人とならしむべきや否や、思ふに、今に於て先づ之を研究せずんば、或は是れ蛇卵日ならずして卿化し、將に其世民を毒する不測なるの患あらんとす。

但し吾人は、近來の總ての小說を擧げて、失敬にも、悉く斯く一評し去るものにあらず。中には、甚だ立派に出來たるものあり。其卷中の佳人は、眞に是れ、申分なき理想の佳人にして、其の頭ま、其の心ろ、斯てこそ、日本男子を高尙にも愉快にも爲し得べくとは信ぜらるれ。只だ憾らくは、斯る上乘の小說一二を取除いたる殘りの、滔々として皆な吾人をして長大息せしむるものにあらざるなきを憾むのみ、吾人不肖と雖ども、妄りに之を評し、敢て女學の爲に一言せざるを得ず。

そもく、娼妓藝妓の如き下賤卑劣なる女原は、吾人もとより堂々として之を斥けずして可なり。彼等は只だ、慾と金とあるを知つて、正義正道の何物たるを知らず。自ら其身を落して、器具無機物に比し。只管に人の玩弄する所と爲りて、其の玩弄せらるゝと、彌よ多きを以て、自家の榮譽と爲す。元來傾城浮れ女の種と云つて、別に蒔たる畑もなければ、素と其由來を聞けば、眞に、最と憫れなる情實の爲に落ちぶれたるものもあるべし。然れども、既に落魄して、地獄に陷いりたらんものは、其の魂しひ漸く衰へ、其の良心漸く消え、絕へて亦た萬物の靈長たる資格を存せざるに至る。左れば、人もし、明白に、眞實に、其の情態を寫さば、何人と雖ども、一讀し去つて之を嫌惡せざるはあらじ。而して嫌惡の極まる處ろ、愛憫を生じ、人或は之が爲に歎じ、之が爲に憤ほり、之が爲に斷然大に救濟の策を決するものあるべしと雖ども、凡ろ狂人にあらざる限りは、何人と雖ども必らずや、之が二の舞を踏んで、其の行いを習はんとするものはあらじ。故に吾人は、先づ固より小說中に藝妓娼妓の立現はるゝことを惡く

むものと雖ども、作者にして若し止を得ず之を記載するとあらば、希はくは、明白に其實際を寫して、決して之を飾るべからず、之を飾らずして、其骸骨を現し、只だムキ出しにして其實際を寫すは、即ち是れ、少女をして尤も之を嫌はしむるの妙法たらんと信ず。故に吾人は、今の小說家が、泥中特更らに蓮花を挿し、暗夜暴りに月を出して、强いて藝妓娼妓に誠を附加へ、陰然、人に之を慕はしめんとするの主旨、何れの處にあるを知らざる也。

小說に現はるゝ佳人の中ち、次に吾人が尤も好しからず思ふものは、其身、尋常潔白の資格を有しながら、其の行ひの尙ほ藝妓浮れ女に相似たるの女流是れ也。彼等は、只だ衣物を飾り、お化粧に丹精し、鏡に向ひ、流行を追ひ、端歌をうたひ、三味線を鳴し、心中に一點の確固たる志操なければ、固より亦た凜乎たる節義もなく、稍ともすれば、男に欺むかれて、容易く之を信じ、之を信じて爲に墮落し、而かも敢て之を悔ゆるの道念なし、彼等が泣くは譯もなき情愛の爲なり、時に髮の結風を非られては、一生の大遺恨とし、服の着風を賞められては、天にも上る如く狂喜し、汎々として浮草の如く、漂々として籾穀の如く、只だ是れ男子の掌中に弄ろばるゝ木丸と爲る、豈に尤も歎ずべきにあらずや。然るに世上輕薄なる男子は、之を以て無二の伴侶ありと爲し、之をヲモチヤにするを以て之を愛すると心得、盲人盲目を誘ひて、相ひ溝壑の中に陷いるもの、滔々として多し。嗚呼眞正の愛は、必ず先づ相ひ敬するの念を要す。既に之を敬せず、之が靈魂を愛せずして、何如で眞正なる伉儷の娛樂を得んや。男女もしいよ〳〵清潔に、いよ〳〵高尙にあらんと欲せば、須らく互ひに相敬愛すべし、斷じて、一方はこれを弄び、一方は之を懼るゝの思ひある可らざる也。果して然らば、彼の浮れたる女原は、吾人が敬愛し得べき女流にあらず、而して、斯の如き女流を好む所の男子は、亦是れ實に清潔なる眞愛を知る所ろの丈夫にはあらざる也。

男子に玩弄せらるゝ所の佳人、固より不可也。然れども、亦た男子を敵の如くに見做して、終始其敵を附ねらひ、事もあらば俱不戴天の讐に報ひんとする、彼の恐るべき女丈夫も、亦た好ましからぬ佳人なるべし。彼等は曰く、男子は數千年來吾々女性の權理を揉躙し、吾々を奴隷の如くし、牛馬の如くし、器械の如くしたり。抑も、天の人を生ずる、豈に男女を以て其の位を別にせんや、男子もし政事家となり得べくば

吾々も亦た政治家と爲り得べし、男子もし學者と爲り得べくば、吾々も亦た學者と爲り得べし、男子の頭ま、算藝に長ぜば、吾々と雖ども亦た幾何三角術の奥に達すべし、男子の心、もしシエークスピアと爲り得べくば、吾々亦たエリヲットたるを得べし、然るに、彼等は吾々を壓制し、壓制して尙ほ吾々を束縛し、遂に吾々をして、今日の地位に至らしめたり。故に、吾々畢生の目的は、此の束縛を破り、此の壓制を退ぞけ、優々として青天白日の下に逍遙し、男子と同等の權理を收めて、一歩だも之が後ろに廻らざるにありと。而して、其肩は怒つて風を切り、其足は踊つて砂烟を飛ばし、音吐朗々として偉男子の如く、口狀節に合つて演説家の如く、目鏡は、朝日に照つてかゞやき、口は固く締りて容易に開かず、頸に卷いたるハンケチは、帝宮の階下ならずんば取らず、直立したる腰は、中々五斗米男子の爲には曲げず、勇氣凛々、威貌堂々、眞に見るも恐ろしき女丈夫なり。而して、吾人は小説界に於て、彼等が數度び演説するを聞いて、甚はだ感心し、或る時は、彼等が劍を舞するを見て、膽をつぶし、又或る時は、彼等が男子を遣込むるを見て舌を卷きぬ、然れども、之を良好なる佳人として理想せんとするは、吾人が斷じて敢て爲すことを得ざるもの也。抑も男子は女子にあらざる如く、女子は亦た永劫に男子たる可らず、天既でに性を分つて、男女に相混ず可らざるの一大區別を賦與せり。其元因に於て既に此の大區別あり、而して其結果に於て性情の大に異る所なきを得んや、性情大に異なつて、而して其の長所の亦大に違ふ所なきを得ざるを知る。元來吾人は、女子に自尊の念なきを歎じ、其の人の玩弄と爲るを慨し、大凡そ人間としては、男女の間だに毫毛も其權理を上下する所なかるべしと確信すと雖ども、然れども、彼の女子にして、悉く男子の行ふ所ろを行はんと欲し、又其の能く之を行ひ得べきを誇るの輩らを見ては、尤も甚しく之を嫌惡するもの也。男子固より長所あるべし、女子亦固より特別に長ずる所あらん、雙方各々其長ずる所によつて、相助け相敬す、則はち、陰陽相和して、伉儷の同等なるものあらん。故に、吾人は、所謂る女權論者なるものを以て、女權の伸張に必要なりと信ぜず、只だ惣べての姉妹が、能く其女德を守り、靜に、確かに、自尊の念を守られんことをのみ祈る。左れば、小説界に現はるゝ女權論者は、一種の偏物にして、固と是れ立派なる佳人にあらざることを、讀者が兼て強く諒知せられんことを望むもの也。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

論説

○小供の精神及び保護法（其五）

榊俶述　佃與二郎筆記

永くて御氣の毒で御座いますが今少し申上ますソコデお友達が出きて來れば喧嘩を致しますが是れも惡るいとではありません一には精神を挫き二には精神を發達させます「イヽエ私のだ」と奪ひ合するのも精神發達の一です故に此時は別に譴責を加へずに後で責むるも宜しい私も能く本郷通りあどで見受け升がお神さんが襷がけで此餓鬼奴と云て拳固を振上るあどは宜しき事ではありません又小供が問題を出して問ひかけた時は知らぬと云ふとあく綿密に分る樣に解きわかしをして遣るがよろしい丁度爰に面白き例があり升或時私は買物をして居ると向ふに母親は洗濯して居りまして小供も其傍に居ました時に烏が檐に止まりましたが可愛想に小供は盲目である、から何だか知らず大きな聲をして可畏〳〵と申すと母親は「アレは烏だから可畏ことはない」と喩しました小供は盲だから「烏と云ものは何だい」と云て聞ますと「黒い烏さと」敎へ次に「黒いとは何だ」と云て問ひますと母親は「此野郎奴」と云て頭を打ました盲者でも小供は聞ふと熱心して居るに此母親の如は實に惡むべき者であると思ひ升ヨク注意せねばありませぬ。

今迄申上た小兒敎育の仕方に基て幼稚園と云ふものを建てヽ有り升彼の有名なるカール、フレーベルと云ふ人が小供は如何なる心持で居るかと考へ組立たのですか實に此幼稚園あるものは氏の實驗と盡力と學問とに依て拵へたのでありますから一口に言へばお子さん方が丈夫に育ち三歳以上にもなったあらば幼稚園にでも送て御仲間を拵へなさるが宜う御座る。

世上で能く申すとには着物を汚すなとか此餓鬼奴とか外に出るとはならぬとか家に居ろとかアバれると御飯を遣らぬとか手を縛つて炭俵に入れるとか椽の下に押込むとか頭を打つあどは最も禁じなければありません頭を撲ても決して心の更まるものでもなく折檻と云ふとは大抵にしません却て母親を馬鹿に致し小兒の精神は横道へ參り升大人でも天窓を撲たれては昏倒するともあり小兒などは直ぐ死ぬともあり升ヒヨムキの邊は最も注意すべき所で御座り升若しも小供を撲たうと思ふなら肩とか臀とか害の少なき部分を撲つが宜しい餘り責めますと精神がいじけて一寸したとにも泣きます私の見る所では日本の小供ほど泣くものはありません三四歳から五六歳の獨乙の小供などは叱つた位いでは睨め返して逃る位であり

升日本の小供なれば叱かられると泣き升又客に往升に母親が無沙汰見舞旁小供を連れて行く小供に於ては如何がと云ふに極めて惡るい事です母君は向ふの主人と話して愉快でありませう然るに小供は二三時間も默して大人なしくして居らなければなりません行儀を能くしろと云て禮儀上から云へば美くしいから私も賛成しますが精神を發育させ樣と云ふ方から云へば大層に惡るいとです小さな形をして大人じみた心にしやうとして却て頭をおさへるのです歐羅巴では客に行くに小供を連れません小供は小供同志を集めるだけで有り升。

終りに臨んで尙お聞に入れたいとは物語りのとであります舌切雀のお話しとか猿と蟹のお噺とか是等は宜しく有升がソレが募るとお化けの話しが出ますアレは大變に害があり升其譯は小供の腦は感じ易く又小供は之を信用するもので化物はコンナ形容と云へば能く之を記憶する者です遂には洗手場にも行くとが出きない樣になり升話し出す母君も平日變化物はないと信じて居ても矢張り可畏下心は有る者と見へ升何故なれば癲狂人となれば小兒の時傳聞た化物が目の前に見へ今爰に幽靈が出たとか狸が化けたとか云ふて本根を明かします夫ですから決して化物ばなしに効能の有者では御座りません。

まだ申上げたいともあり升が餘り長くなり升から今日は是れだけにして殘りは後日に讓り升。(完)

○日本婦女の地位(其三)

伴直之助述

思ふに當會諸姉は玆に着眼せられたるや明かなり果して然らば當會は婦人の風を矯むると同時に一般に婦女の地位を進め其の品性を高くする方に力を用ゐざるべからず婦人にして品性高く地位進む時は男子は勢ひ之を懇待し又た之を恭遇せざるを得ざるなり彼の慷慨ある女權論者は頻りに男子の行爲を責む男子固より責むべき所多しと雖とも己れを顧みずして獨り男子を責め之を抗辯論爭するは果して婦女が其地位を上ぐるの良法と云ふべき乎鎧師は宜しく其躰を傷つけざらんとを勉むべし復た敵矢の鋭鈍を問ふと勿れ婦女にして若し我が髮猶ほ斷つべし我が心奪ふべからずとの」精神ありて而して實際男子を感化するの實力あらば其地位の下卑ならんを欲するも決して得べからざるなり」又近頃時事新報記者は婦人に關して長篇を揭載せり盖し其大意は男尊の尊を取りて女卑の卑位に落さば則はち男女懸隔の弊を矯むるを得べしと」云ふに在りしと覺ゆ余輩を以て之を觀るに今日婦女の地位は極めて卑しと雖とも男子も亦た決して高からず既に高からざるの男

子を落して更に卑賤の婦女と併行せしめんとす豈に怪しむべき論にあらずや記者にして若し婦女の地位を卑しとせば何んぞ之を進むるの計を爲さゞるか抑も記者は我男女をして今日下等社會に行はるゝ無責任の同權に至らしめんとする乎是れ余輩の首肯する能はざる所なり。

果して婦女が自ら奮て其地位を進むること斯く急要なりとせば先づ一般に且つ實際に之を進むるの方法を究はめざるべからず此點に關して余輩は諸姉に望むは先づ善良の室家、善良の母たらんこと是れなり」女權論者の勇將ハルバルト、スペンサー曰く威權、才智兼ね有したる女王はゼノビアよりカザリン及びマリア、テレサに至るまで世に多くこれあり精確學（天文物理等を云ふ）にはサムバーヴ井ル夫人、ハーセル孃、ブルリン孃等名甚だ高し、經濟學者にはマーチヌー孃あり、哲學者にはマダム、デ、スタウルあり、政治學者にはローランドあり、詩人にはタイゲス、ヘンマンセス、ランドン、ブローニングの輩あり、歌曲にはヨアンナ、ベイレーあり」と此の他婦女の身を以て大業をなしたるもの數ふるに遑あらず而して彼の纖手を以て佛國を既に倒るゝに救ひたる勇婦ジャン、ダークの如き一枝の筆を以て苦楚を悩める奴隷を拯ひたるハリエット、ビーチョル、ストゥの如き或は身を艱難の中に置きて力を慈善の事に盡したる義女、博愛家ハンナモーア、サラ、マーチン、フライ、ナイティンゲールの輩蓋し之れが魁となす諸氏は社會に事業を興したると共に婦人の地位を進めて天の使の如くならしめたるは余輩の感賞する所なり然れども是れ非常の人物が非常の時に遭遇して以て非常の事業を成就したる非常の特例あれば一般の婦女に向ひて之を望むは理なきことと云ふ可く當矯風會も亦た斯の如き偉大の婦女を出すことを以て其の目的とせらるゝにあらざるべく而して余輩か當會に望む所も亦た此の一人の豪傑を出さんよりは寧ろ數万の賢婦良女の輩出することに在るなり、抑も公事は私事に始まり、一國は一家に起り、一家は即ち母に發す、故に母の德不德、賢不賢は社會の大勢に關すること決して少なからざるなり、語に曰く能く家を理むるの母は總理大臣の才能あるを要す」と以て其任の容易ならざるを知るべし、思ふに良母たり、賢妻たるものは實に執權たり、政治家たり、將た總理大臣にして彼の女傑等の事業よりは或ハ困難ならん蓋し良母賢妻たらんと欲せば才德、學藝を「マンペン」なく發達せざる可らざればあり、賢母良妻ハ先づ道德堅固にして神恩の裕あるを要し、

性質温良にして愛心の深きを要す、裁縫、割烹(近時は洋風をも辨ぜざるべからず)手跡、編物は勿論會計を明にし、家内を整理するの才と夫を助け、兒子を教育するの學問なかるべからず又た人の最も修養し難き交際上の知識熟練は賢母良妻たるに欠く可らず(妻君の冷遇の爲に良人の朋友を遠ざくる等の類必ずしも無しと云ふ可らず)殊に或る家に於ては妻君は金錢の繰り廻はしに巧者ならざる可らず、又た物價金利の高低に由りて損得を來たすが故に經濟學を要し、資産負債を明かにし遣ひ拂ひを正しくせんには算學と簿記學を要し、切要なる法律規則を知らざる時は飛んだ間違を起すべく(目方二匁の郵書が幾何の税なるやを辨へざるは極て不便なり)古へは稍ゝ和洋の歴史人物に渉り今は日々の出來事に通ぜざれば兒子の教育、世間の交際を爲すに不都合を感ずべし此の諸科にして既に修まり生理、物理、政治の大躰に通し文學に達して賦詩詠歌を能くすれば尚ほ賞すべく「チーガン」「ピアノ」「バイヲリン」に堪能ならんには更らに重疊と云べきあり若し日本の婦女にして其地位の卑きを思はゞ宜しく以上の諸德諸能を修むべし蓋し一家の中狹きが如しと雖ども以て諸姉が才を伸ばすに足るべく一家の事小なるに似たれども以て諸姉が勇を試むるに餘りあれば否な婦女にして始めて此大任を盡すを得べし男子は是境界に於て殆んど無用の長物に過ぎざればなり。

諸姉はゼレミー、テーロルの言を記するや否や、其言に曰く善良の妻は天が男子に賦與せる最良の恩賜なり、彼れ能く天惠を傳ふるの天使となり、諸德を生ずるの萌芽となる、其聲は夫の美妙なる音樂となり、其笑顔は夫の爽快たる天氣となり、其の接吻は夫をして罪より免がれしむるの保護者となり、其細腕は夫の危きを救ふの材となり、夫の健康を補ない其生涯の苦を和ぐるの醫藥となる、其勤勉なるは以て夫が富を致すの確證となるべく、其節儉なるは以て夫の最も誠實なる執事となるべし、其唇は夫の信實なる相談役となり、其胸は夫を休むるの軟かき枕となり、其の祈は夫をして天祐に浴せしむへき最も有力なる助讃人なり」と若し婦女が妻として斯の如き親愛を夫に盡す以上は母となりて更らに幾倍の慈愛を顯はすべきや古來賢聖俊傑は必ず賢母良妻より生れたるを考ふる時は他は又た言ふを要せざるなり。

余嘗てジョーヂ、ワシントンの逸事を讀み、彼は屢々國事を閨房に攜さへり」との一句を見たり蓋し米國創建の際盤根錯

節殆んど手を下す能はさるに當り彼れ屢々其妻メレーの意見を聽ることを謂ふなり、其他ルーテル、ボルク、ギヅー、ミル、ヒッチクック、フオーセット、グラッドストーン等諸氏の妻は或は政治に或は文藝に倶に其夫を助けて大業を成就し婦女の身を以つて或は内閣顧門となり或は秘書官とあり或は改革家の領袖となり或は文壇の勇將とあれり又たベーコンの母は自から「ノーバム、ヲルガナム」(歸納法を再起したる著書)を著はさゞるも之を生み出したりと稱賛せられジヨン、クインシー、アダムスの母は自ら大頭領となりて米國の政治を改良せざるも間接に與かりて力ありと云はるゝもの豈に婦女の光榮にあらずや。

男女同權果して我國に行はるべきや否や其論は暫らく措き唯だ〳〵我國の姉妹にして其地位を進めんと欲せば斯の如き理論に耳を傾くることなく先づ手を家政の改革に下し其妻となり母となるに當りて善く各自の本分を盡し夫を助け兒を育てゝ以て國家の文明を裨補せられんこと余輩が諸姉に希望して已まざる所あり諸姉若し此大任を盡して而して餘力のあらん乎則ち宜しく直接に力を社會公衆のことに致すべし果して斯の如くんば諸姉が地位の卑くからんことを欲するも輿論は之を許さゞるを如何せん諸姉の前途蓋し亦た多望と云ふ可き也(完)

批評

(97). 涙の谷　(中本一册(七十三頁)定價三十錢 發兌所東京本町三丁目金港堂)

此書は天香外史と稱する小宮山桂介氏の著にして此度出版せられたるは其の第一卷發端なり。元來女を主人公としての小説あるよし承はりて不取敢通讀するに、此卷には幸子小大の二女が新月の夜三日月が一寸と顔を出す如くに現はれたるのみにて未だ左したる大出來事のあらざる處ろ也、但し此の發端によりて推して之を想像すれば本書の趣向ちと八十日間世界一週の工夫に似たる所ろあり即はち龍田大介と云へる男主人の嚴密剛强にして任俠に富めるの氣象餘程面白く感ぜらると共に何となう彼の小説の事の思はるゝ也、卷末に至り

余は自宅に還りて手簡を認め了り直ちに旅館を出で、郵便取扱所へと馳行たるが此時既に夜半を過ぎて月下に立つものとては只一恭の郵便投入函のみ天高く地蒲かにして悲壯の光景我が精神を淸からしめ斯る大地球が默して軌道を回轉する間だに無數の微分子に均しき我々人類がこの涙の谷に相競ふて哀樂の賣買をなし居る者なることを覩ぜしめぬ

と云へる高尙優美の觀念を以て涙の谷と云へる表題の意味を暗示したるが此邊の趣きによれば少々泣き過ぎる樣にあらずやと思はる、然し文章の重々しく談話の論語めきたるにも關はらず全躰の風甚はだ高尙にして一種出色の樣姿ありこれよ

り後ち如何に書現はさるべきかは知らず今の處ろにては女流の購讀ありて然るべき小説なりと信ず。

(68). 玉霰窓廼小篠、（大本四冊(合百八十七葉)定價二圓 發兌所東京南傳馬町 吉川半七）

此書は故人中島廣足氏が嘉永七年の頃に著述し置かれたるを今度同惟一氏が増補出版ありたるものなり前篇上中下の三卷は廣足氏の手に成り后篇上下二冊は惟一氏の手に成れり上下合して五卷が間だに凡そ一百五十程の雅言雅語俗言通語等の解釋を記るし其證處を代々の撰集諸家の家集あらゆる物語くさ〳〵の草紙などより求め出し最と鄭寧に最と明白に説明されたり和學に志あらん女方には此上なき珍重の書なるべし今ま其の一斑を示さんが爲めに「をかし」と云へる一節を左に揭ぐ

をかし　おかしの假字二つに書分るはひがごとにてめづる心も笑ふ心も共にをかしと書べき由今は諸説定まりたるに伴信友翁の比右婆衣に猶くはしき考ありていよ〳〵うたがひなく成にたり扨てめづる心の方なるは文にはいとおほかるを歌にはなほまれなるに一二首見出たるを茲にあぐ

（大和物語）たましひはをかしきこともなかりけりよろつのものはからにぞ有ける

（小大君集）よのなかにつゝまぬとしのあきならハさかしからましけふのなぬかも

（兼盛集）なにせんにひとをゝかしとおもひけんこひするゝてのやすからなくに

○陳言一則

本誌は主も婦女方の覽に供ふる者なれば從來此の欄内に於て批評する所ろも自然數多ある新著書中のたゞ一部に限り即ハち直接に女學に關係あるものか若くは小説和歌和學等の書にして女流の多く購讀せらるべきものか何れにもせよ當今の姉妹達が一讀を要せられんとする類ひの著書に付きて先づ其善惡を評し少さか讀者の便を計り來りたるところ女子教育大進歩の影響として女流が購讀せらるゝ書籍の區域も亦た隨て大ニ廣ろまりたれば次號よりは更に批評の制限を擴ろげて從來專ぱら批評したる如き類を精密に可否するの傍はら諸種類の新著書をも簡短公明に畧評すべし斯て是迄はわざ〳〵投與せられたる新書籍を其儘に受納して本誌上に一言をも審議せず寄贈者に對して甚ハだ殘念ニ存ぜし處ろ以后は其樣の遺憾も無之候依て全國の出版者諸氏にして若し本誌上に批評を呈するを許さるゝ向は向后成べく新書一部づゝ寄贈ありたく尙ほ右の趣き兼て讀者の注意を請ひ置たく　陳言如此

叢話

○米國婦人禁酒會々頭の來書

左はウイルラルド孃より我が東京婦人矯風會々頭なる矢島かぢ子に向て送られたる書狀の譯文なり（書狀一月發三月着）

我が萬國婦人矯風會の機關なるジ、ユニオン、シグナル雜誌に揭げたる千八百八十八年（本年の事）の新世界人名錄と題せる一項に於て貴國及び萬國姉妹方の御名を拜讀仕つり吾が會の神聖なる精神の此く遠く速かに廣まりたるかと心中ひそかに欣喜の至りに堪へずこの姉妹方の寫眞を吾が書齋の壁に掛け置き余が毎日朝より夜まで此室に在りて演說の草稿などを書し仰ひて之を眺め是れ皆な白里本軍の吾が同胞姉妹なりと思ふ喜びは實ニ此上なき事に候。

貴國の姉妹方ハ多分ジ、ユニオン、シグナル雜誌を御覽成されたりと存じ候されば吾も御仲間の一人なる事を御承知に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

相成たるものと考へ申し候されば わが會の請願書ハ速かに姉妹の國々に於て數十萬姉妹の調印を得られんとを望み居り候何とあれば此の同盟者二百萬も出來候はゞ早速に請願差出しの手續に運ぶべし併し今日まで同盟者の出來し割合を以て考ふれば五十萬の同盟者を得るとさへ中々長き歳月を費やし候はんと考ふれば我が姉妹かたの勢力に由て此の大業を助け成就せしむる爲に教會慈善會等の姉妹方の賛助を得る事の出來間敷候ふや余ハ出來得るだけの助けを得て此の請願を成就せん事を欲し居候余は各國政府へ呈する請願書の回章を認むるの時節到來を待居候又余が企ては充分に諸姉妹に了解られずして多く賞賛を得ざるを憂ふる所に候 されば貴國の姉妹がたは新聞或は通信などに由て實際のありさま御報道被下度候是即ち余が目的を達する第一着と 存候。

姉妹の方々は公私の學校に學問上より禁酒の教へを特に引入するとに御盡力出來間敷候哉されば其子弟の時代となれば禁酒の改革立派に相立可申 候 余は世界婦人矯風會 副會 頭の一人に御座候得共姉妹への教書を贈りて矯風會の爲め働く全世界の人々の爲め余は余の家にて必ず正午にハ祈禱を爲すとを記臆せられんを告げ併せて姉妹の方も余の爲す處に倣はれんとを御勸申すなり又余は皆々樣方に向つて余等が愛國心純良及び平和の記號とする彼の白里本を必らず帯びられんとを強て御勸め申すあり余ハシ、ユニオン、シグナル雜誌に記せし昨年の年會記録を一冊づゝ皆々樣方に御贈り申したり其内には合衆國の各地方よりの代理者がナシビルに集會して爲したる事業に付き詳細の記事あり候皆々樣方ハ各地方及び各國の新聞紙に右の一節を複載可被成儀と存候 又余は吾女丈夫なるメリー、クレメント、リビット夫人の踵に襲ひて又良善なる婦人をして各國を巡回せしめ眞理を傳しめんと目論見居候。

一千八百八十八年一月廿七日　米國イリノイスイバンストンに於て　フランシス、イー、ウイルラルド

○細君と下婢

若し一家内を以て一國と致して見れば、細君ハ即はち總理大臣にして、下婢は是れ此の大臣の秘書官の如きものであります。故に此の雙方ハ、餘程能く和合して、萬事を同一の思ひを以て致す樣で無ければ、一家内ハ迚も立派にハ治まりません。茲に例に引くハ恐れ多きとでありまするが、今の日本總理大臣たる伊藤君は、眞に不世出の賢明なる方で、固より非尋常のお働たらきある良臣では御座るが、其の賢明なる數多の政事を發表なさるゝ迄でにハ、陰然數多の内助があるとと

察せられます。即はち伊東金子なんど申す、一騎當千の御家來が、大臣の手と爲り足と爲りて、万事に大臣のお意思に隨ひて立働らかるゝの助けも亦た、少なからぬ功能を爲して居ることと思はるゝです。扨て小なれども一家は猶ほ一國の如きものゆへ、細君家政を總理して、日夜に經營辛苦せらるゝとき、其注意は何れ程に至れるとも、中々一人の手にては迚も万事を爲すことが出來ませぬから、即はち其手を助け、其心を受嗣ぐ所ろの秘書官が無くては成らぬ。然るに、此の細君お附の秘書官と爲るものは、外に無い、月俸一圓即ち年俸十二圓の高金を戴き、お爨に敘し、お竹どんと命ぜられ、奏者兼鈴の役をも相勤むる、下婢であります。

左れば細君と下婢とは、其間だ魚と水との如く、お砂糖と熱湯との如く、甘まく親和せなくては成りますまい。若し此の双方の仲が非常に滑らかに參りませうならば、一家の治まりは何れ程に宜しひか、實に思ひ遣られて既に羨ましひ程であります。即はち、買物、料理、洗濯より、子供のお護り、お客の待遇、且那の取扱ひ方に至るまで、假令ひ細君が手を下さずとも、大抵は下婢の手を假りて、之を辨ずることが出來るように成りませう。左樣ならば、細君は今の如く、眞に細々しひ雜事を悉く自ら取扱はねば成らぬと云ふ不便も減じて、自から餘暇が出來ませう。既に餘暇が出來まするときは、即はち、時としては書物も讀まれます、時としては音樂をも弄することが出來ます、最と多く精神上の事に注意して、其夫を慰さめ子供を教育することに付て、大なる進歩を爲すことも出來ます。必竟するに、今の細君の如く、朝より晩まで、お膳に追掛られ、洗濯に催促され、子供に泣立られ、御亭主に叱り散らされて、寸分の餘暇も御座りませんならば、中々書物一冊讀むことも出來ないのみか、此の女學雜誌一號でもゆる〳〵と、お讀みになることが出來ません。箇樣に繁忙極まつて、少かのヒマもないように定まつて居りまするときは、第一女子教育を此上に進歩さすることも出來ず、第二に細君の精神上に餘裕を與へて、家族の樂しみを更らに多く増させると云ふ手立も附かず、御亭主も子供も氣の毒なれば、當の細君も亦た實に、お氣の毒の至りであります。故に細君と下婢との間柄が立派に成つて、細君の繁雜なる仕事の幾分は、之を下婢に任せても差支へないと云ふように成ることは、啻に一家内の治まりの工合のみならず、其の家内の和樂の上にも、子供の教育の上にも、尚ほ女學惣躰の進歩の上にも、大ひなる關係のあるもの

であります。凡そ世の中の事業を致しまするに、一人にて何も彼も爲さんとするは、誤まりの第一であつて、箇樣なる人物に、立派なる仕事の出來たる例しは御座りません。夫故へ善く人を撰みて擧用ひ、能く之を信用して己れの勞の幾分を托し、たゞ能く公平寛大に之を召使ふが即はち、長者たる人の心得であるとは、支那の歷史にも八釜しく申してあり、實際の事業家よりも、毎々其說法を承はるとであります。然るに、家を修むると云へる一大事業を致す時に當つては、妻たるものが之を悉く自から爲すべき筈であると申すは、實に殘酷極まつたる、矛盾極まつたる考かと思はるゝです。一家を甘まく切盛すると云ふとは、中々の困難で、大小の相違こそあれ、一國を總理すると、左程の違ひは無いです。古し或る人は、己れの家の臺所を能く取締て呉れゝば、大藏省の大書記官には登用して遣ると申したと云ふ樣なる、話しがあるです。一家の總理は實に容易ならんとであるに此の總理大臣は、秘書官を一人も要さない、何でも自身で爲るが善いと申すのは、甚はだ當を得ん話しであるです。

左れば、細君は下婢と云へる助け手を必要すると申す一條、明白に相分つたと致して見まして、扨て細君と下婢とは、即はち水魚の如く、砂糖湯の如く、甘まく親和して參るかと問ふに、中々何う致しまして、決して／＼其樣なとは少しも有ません。凡そ世の中に、細君と下婢とほど、仲の惡るい主從は有ますまい、又此れほどに、輕薄な頼母しくない、君臣はありますまいと思ふです。細君は、下婢を盜賊の如くに思つて居ります、手拭一本無くなつても、其疑の目は早くも彼の上に落るです、買物が少々高くても、直樣疑念を起すと云ふ次第、中々之を信用するとか、之に經濟を托するとか云ふ樣なとは決して出來ません、甚はだしきは、下婢が少し氣を利かせて、旦那を鄭寧に取扱へば、細君之を喜び所ろか、何故に、突然として角ようのものが額の上に現はるゝと云ふ景况で、御亭主のおもしろひを半ば彼に頼むなどとは、夢にも思はれんとであります。細君の下婢に於ける既でに斯の如くなれば、下婢亦た細君を大臣さまの樣には思ひません、下婢が細君に於けるの心中を寫し出せば、實に二目と見られない程の嫌惡すべき人情を含んで居るとであります。(未完)

○古今女風の比較

左の一篇はわが頌榮女學校卒業式の際鈴木先生の演說せられたるなれど我が同胞姉妹の爲め心得となるべきふし／＼も少なからぬやうなれば拙ぬ筆ながら筆記のまゝを貴社に投す。

鈴木弘恭演說
塚本ふじ子筆記

○わがつま　しのぶ

ひねもすほかに、わざとれば、
こゝろはうみて、身はつかれ、
しばしいこひて、やすらふに、
おもひをやすむ、ともゝなし。

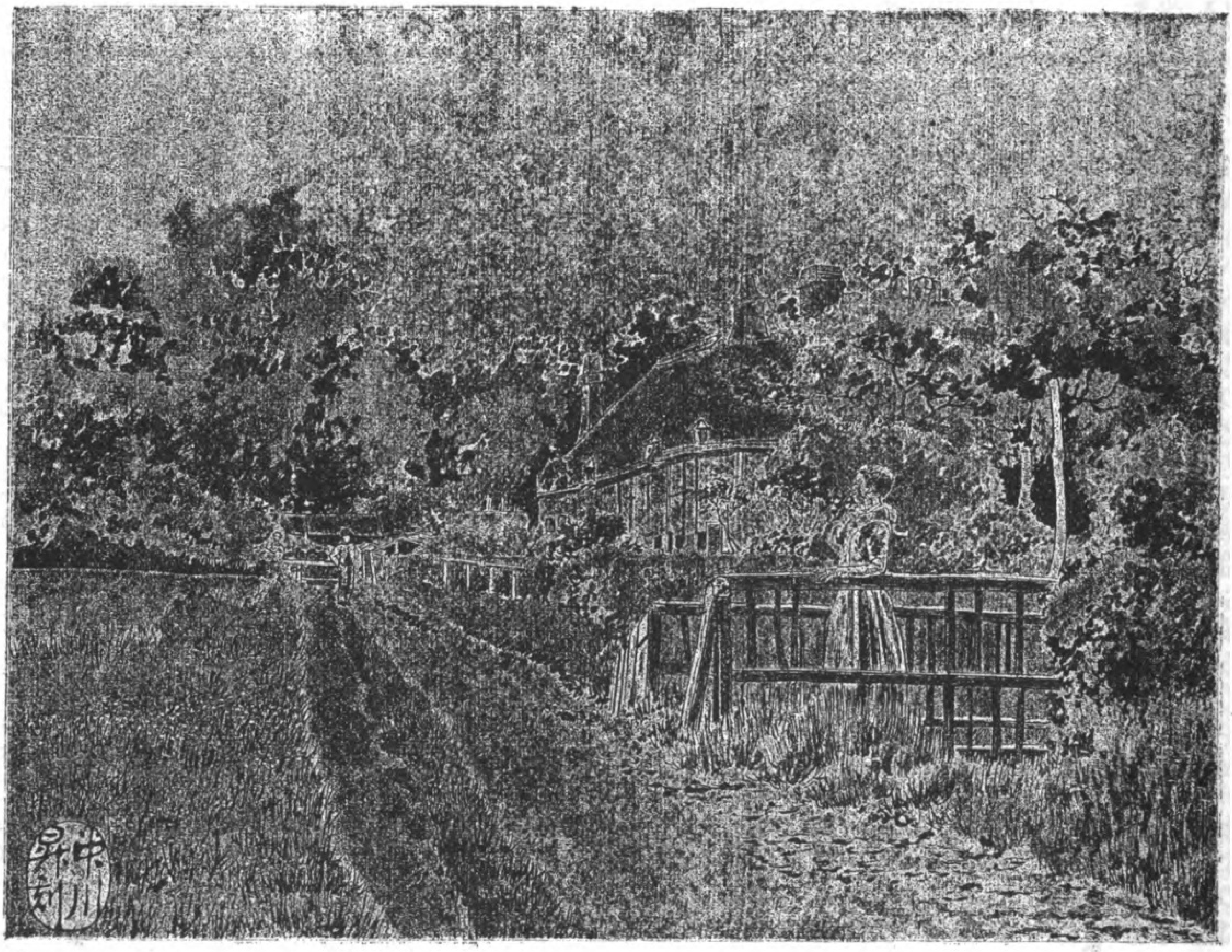
たゞあくせくと、つゞけつゝ、
こゝろせかれて、はたらきぬ、
いへにはいへに、かのひとの、
われをまちつゝ、まちぬらん。

日はせい山に、かたぶきて、
はるのゆふべの、おぼろなり、
野もせのみちは、ひとたへて、
しづけくさびし、かへるころ。

しづけくさびし、みちながら、
あゆみはさらに、うきたちぬ、
寸々いへに、ちかづけば、
歩々にこゝろは、うきたちぬ。

あなやわがいへ、みへにけり、
いへの戸まへに、わがつまは、
もろてかざして、みへにける、
あなやわがつま、わがつまよ。

つかれわすれて、わしるなり、
かれまたわれに、ちかづけば、
新げつくもまに、もれいでゝ、
はづかはし氣に、うちゑめり。



本日は本校の卒業式なれば祝文でも呈せんと存じましたがさて祝文といふものは大概きまりの文句にて學校が盛大に成たとか生徒が進歩したとか尚ほ將來益盛大にならん事を望むとか生徒諸子愈勉強したまはんことを乞ふとか云ふやうなことで是を一口にいはゞ寧ろ「コンニチハオメデタイ」といふ一言にて盡きませうさて祝文はそのおめでたいといふを眼目としてそれに美はしき言を加へて文をあやなすまでに止りて生徒がたに格別の利益もなしと考へますから今日は其に代へて談話を致しませう但し面白い話しではないが貴孃等が歴史上の參考にもと思ひて御話し申すはけであります。

さて近來切りに男女同權といふことを申しますが是はなかく難きことであります我が國は西洋各國と異ひてなほ六ケ敷いですかく云ふと皆樣が御立腹かも知れんが實にさうであれば誠に困つたことだと考へますしかしながら是も仕方によりては甚だざうさもない事で或は却て男女同權どころではなく女尊男卑といふやうになるかも知れません其の理由を御話し申すのであるから暫時の間よく注意しておきゝください。

先づ我が日本國の上古のやうすを見れば大に男女同權に近い風俗でありました(尤もこれは外面よりいふまでなり)古書によりていふのであります日本の古書は後世の書とちがひ人心が質朴なれば言の上に於ても一切飾る事なくありのまゝを書記してある故に隨分證據となることが澤山ありますこれに就て見ればまづ大古に伊邪諾尊伊邪冊尊といふ二神おはしましたる事は皆樣も御承知ならんが此の諾冊二尊が互に物語りしたまふ條に男神は女神に向ひてアガナニモノミコトといひ女神が男神に向ひてもアガナセノミコトといへり又男神が女神にものいひ給ふに云々シタマヘといへば女神も男神にものいひ給ふに何々シタマヘといふやうに同等の口のきゝかたにて更に男女尊卑の別はありませんでした此の一事は言語上にて男女同等の證據を申すのであります。

又衣服の製も男女同じ樣でありました萬葉集の歌の中にも極親愛する男女の中には衣を取替て着ることなどが多く見えます現今の如くなればそんなことはとても出來ませんさて又女も裳をつけたることであります是は序に服製も男女同等なりといふことを一言申したのであります。

次には男女とも心持ちが略相似てをりました(と申したなら)夫は虚言ならん心の同じからざることは人々の面の同からざる如と古人もいへるものをと思ひ給ふならんが私が申すのは後

世の女心の如くにぐつ〳〵していないで男子のやうにサッパりとした心持にて活潑でありましたといふとです故に戰爭でもあると女子も出陣して軍をした例が澤山にあります又馬に乘るとは平常のとにて女もよく馬に乘りましたさて朝廷より命令がありて乘馬のとは女は横に乘るべしと歴史上にも見えて現今の西洋婦人の如く横に乘るのであります是は男女共に心持が同等で有たといふとをかいつまみて申すのでありますが皆様いかゞ思ひたまふか。

序に一言申すと婚禮の式も今とは大違ひだ先づ丸で後世とは反對して居ります後世妻を娶るといふは女が男の家に來るとであるが古へのは男が女の家に行く例ですまづ夫婦の誓約を結ばんとする時は前以て互に文の往復を數回して互の志を通し女の方にても彼の男は我が夫として然るべき人物と思ひ男の方にても彼の女は我が妻として然るべきものと思ひさて互の親達も然るべきものと思ひて始て縁談が整ふので然して良辰をゑらびて婚禮の式を行ふ其の婚禮の時女の方にては用意を整へて待ち受ると聟殿が立派にして來り祝杯が濟むと三日間は必す女の家に滯留するのであります夫より我が家に歸り官員あらば朝廷へ日々出勤しても退出よりは女の家へ歸るといふ例です又一月の年始の禮服は勿論寒暑の衣服も夫の着用するものは女の方にて製調して送りますが男より金錢を贈りは致しませんソコデ男はたいへんに都合がよい良き女房を持つと立派な衣を着て甘い物を食て安樂に暮せるといふやうな譯であるがまさかさうもいかない男方よりも流行の衣服地とか立派なちりめんの新形とかいふやうなものをやはり送るのでありますさて二三年も立て小兒が產れるとか或は左もなくとも女の家が遠くて便利がわるいとかいふと男の方にて一室を新築して其の新造の室へ妻を轉住しむるとであります即ち是よりは家來の僕婢等これを御新造樣と呼ぶ例でありますさて是れは中等以下の令男令孃の婚姻のさまであるがこれだから女にもなか〳〵權が有るのです。

次に遊戯上よても男女同等ありしとを申さば古人が面白と思ふ遊戯は舞踏會でありました此の舞踏會といふは上古より流行したる事にて京にも田舍にも甚だ盛に行はれましたゑかし現今の舞踏會の如く立派に舞臺を設けて踏るわけではない大抵道路の廣き場所にて毎夜踊るとあり一年の中夏夜秋夜は尤も時節がよき故に多くは夏秋の夜であります此の舞踏の尤も有名なるは筑波山上にて四月の始めに催す舞踏會なり是を

筑波の嬥歌といふ万葉集に此の歌があるが「人妻に我もまじらん我妻よ人もことゝへ」といひて人の妻と我と手を携へ我が妻と人と手を引きつれ舞踏することにて是に會すものは二三十里も遠方より集りてきますが今と違ひて馬車も滊車も人力車もないから泊りがけに道中してくるのですが隨分やくかいな騒ぎですしかしながら舞踏會は男女の風俗を亂すとて屢禁せられてもやはりかくれて踊るやうな風俗でした近世まで盆踊と稱して七月になると田舍の男女が踊り遊ぶは餘風の殘つたのであります一年中農夫の休日の多きは盆中にて大陰暦七月十三日より十七日に至る五日間位これを擧行するです明治の御代にありて益嚴禁になりましたが猶田舍には踊る所もあるやうです北國筋は尤も盛なるものでありましたさて人妻に我も交らん我妻に人も言問へなどいふ所を見ると男女同等にて決して夫が妻を壓制する權理は見えませんから遊戯上より見ても男女同等でありました。（未完）

小說

○都鳥　石橋忍月

第三回、親なればこそ子なればこそ（上）

波之助がお八重を我寓家に伴ひ歸りし翌日、母のお咲は平生至ッて物柔かな慈悲深い質にも似ず最不興顔に

母、波さん、あの女は一躰如何した者だ　ヱ、斯樣な事は前以ッて阿母さんに斷ッた上で……一應相談してお呉れでなけりや困るぢやないか　ヱ、夫れにお前には……

波、そんな事は阿母さん誰だッて知ッてゐます、が誠に不憫な身の上ですからッイ阿母さんに伺はず（と是よりお八重の來歴を語り出す終始を略記せんに）

お八重の父は元、關西某藩の士族にして維新の後東京に移籍し公債證書の餘光にて人並に生活せり明治四年母親お何との間に一女を擧ぐ是れ即ちお八重なり母は產後の惱みにて間もなく此世を去り、不足ながらも父親一ッの手で相當の保育を受居しが、それとても暫くの間で、兄の放蕩の爲貯蓄の金錢財具は大方は遣ひ荒れ剩え父がまさかの時に秘藏したる數多の古金銀を盜み出して逃亡されしと同時に玆所の料理屋彼所の茶屋より息子の勘定催促アレやコレやの災難を苦にして父は大病、長煩ひの上句終に冥途の旅人となる、殘された娘はまだ十二三の世間見ず、垣の手寄を失し牽牛花同樣つれなき日影に照されて露のひぬ間に凋れ掛しも叔父某の信情に賴り現時

某省の要職を勤めらるゝ清原家の小間使に雇れて兎に角、安堵の身の上とはなれり

均しく是れ憎むなり然れども男は「糞ッ他日を見よ」と臂を張女は「悔しイ」と思つめて直に復讐を謀る實に險しき世途かな實に樣々の人心、玆に清原家の滿子孃と呼べる妙齡の貴女は毎日華族女學校に通ひ玉ふ時も英學教師ウヰンター氏の宅に通ひ玉ふ時もお八重をお附添として召具し玉ふ、八重の心掛善きにや將た天才あるにや本尊樣の滿子孃より八重の方、物覺よく時々の復習には八重が補教するとも屢々なりされば清原殿には令孃をお叱り遊ばす時は、いつでも「アノ八重を見よ」との枕詞が附く、令孃は是より何故にや八重を見ると以前の如く親密ならず其一斑は車夫が「内の孃がお八重ぼうに口听た事見たとがない、邸の玄關から四ッ谷門の學校まで二十町餘も合乘して居乍ら膨れ返ッた顏色で、いつでもだッまりだ」との話しにても推測し得可し、令孃は阿母樣に向ひ八重の爲めには利益な事か將又不利益な事か知らねども何か時々泣て申上げ玉ふ、令閨も流石は賢女さらかに「今少し辛棒おし阿母さんも量見があるからと被仰ッた

清原殿とは親交あると見え折々出入する綾瀨良政と云へるは清原殿と同省の某局に重役を勤め當時洋行歸りの達役者、臺所にては下女と下女口かしましきは端女の習ひ、チョット寄ッても「綾瀨さんはアノ廣い御役所中にも、最一人とない器量よしあんな旦那を夫に持ち奥樣に成る人は仕合ものじやあいかいな」と御殿の婢女中めきた男の噂を立聞玉ひし滿子孃は、いつしか妙な感情を惹起し物や思ふと人々に問はれるやうになり玉ふ、されば綾瀨氏が訪れし時は直に走り出でゝ好意を表す可きに左はなくして直に化粧部屋に入り短く共三十分位は費し玉ふよしけふしも、正月の三日旭旗の色は醉顏に映して紅に、名刺の配達稍閑を覺ふの時清原の家中に歌留多會のお催あり奥坐敷は笑ひどよめく男女の聲、内に奥樣の聲として

奥「逢ふとの絶へてしなくはなか〳〵に

綾瀨「人をも身をも、どこへ行たらう、ソラお八重さん鼻毛拔ぐよ

八「ア、ラ眞實かと思ひました、妾の所をお取遊ばすと承知しませんよ

滿子「ハイ有りました

八「アラお孃樣おづるい、それは人目も草もですよ、人をも身をもは玆に有りましたワ

滿　さうかエ只間違ッたのだワ、何にもづるいのぢやない、人、ホントに八重は Misery (不幸)だよ

蓋し滿子孃は Miserly (卑劣)のお積りでお八重は氣の毒さうな顏をして「一々妾が惡う御座いました」と謝罪する綾瀬氏は何かフト考え出しフヽッと吹き出して滿子孃の顏を見る

「內塲なら兎も角、人樣の……綾瀬さんの前で主人を嘲弄して、罵詈して失敬な」と滿子孃は大層に御立腹「八重がついて行のあらモゥ學校は退ます」と被仰る嗚呼人を使のも六かしきものなれども人に使るゝ身の氣兼苦勞も容易の事にあらず

或日淸原令閨は滿子孃を具して里方にお出で遊ばすと生憎大雪が降ッて此宵は一泊するとの報知が來た、淸原殿は晩方醉を帶びて歸館なし玉ひければお八重は火鉢に火をつぎ、茶瓶に茶を拵えて奧の間に持ッて行く

「アレお止し遊ばせ奧樣に叱られます」とのお八重の聲を忠義なる內膳部長、一名臺所の總裁お鍋女が聞き附け傍よお多辨してゐた車夫に向て「シイッ」と中止を命し仔細らしく耳を欹てた、暫くして迯るが如くに走り出て來たお八重の樣子をヂロリと見守た」翌日奧樣は殿のお留守中に御歸宅になるや否、例の忠義なる部長は奧樣がお召換にもあらぬ內何かヒソ〱と告口した

アヽヲ不思議なるかな迅速なるかな、中一日を隔てゝ後、奧樣はお八重を呼び「モゥ滿も學校を退なくッてはならず、かたがた內も今の樣に人が多ッては」との詞を冒頭に置て色々長々と親切に申渡され段々と歩を進て終に「氣の毒だがお前にも暫時一先、暇を取て貰わなけりや……長々忠實に勤て呉て何だけれど、……これは僅少だがホンの叔父さんの所え行く路用の印迄に……と半紙よ疊た物を賜ッて嗚呼其果決驚く可し思ふと儘ならぬこそ浮世とは誰古への諺言、今は我身の上にふる淚の袂絞りつゝ哀れやお八重は其叔父を尋ね行く途中にて圖ざる災難に逢ひしも波之助の情にて一旦福島の旅亭に助け行かれ翌朝和名田を尋ねしに杖柱とも賴みてし叔父は客冬身亡りて其住家さへ今は人手に渡りしとは重ね〲の不幸の數、お八重の悲哀、お八重の失望、思ひやるだに淚の種。

○小說神髓

蘇格氏著ケチルチルス　(第十一回)

レスター侯邸に歸りて復たび欝悶しバーチーを召びて今日の處置を怒り吾れは今日寧ろ万事を明打けて陛下にあらゆる秘事を白狀し一層この窮屈なる思ひを止めんとは思ひたるに汝

ちが計らひにて事々に反つて六かしう成れりと怨言すバーチー之を慰さめて君不世出の才を抱きて稍ともすれば左様速かに青雲の志を靡し玉はんとするは何事ぞ陛下の御覺へは朝廷三千の官人中君に於ける如きはあらず今ま位極まり權極まり將さに之より一段の大幸福あらんとするとき忽まち左様に果敢なき思ひを起して既に天に達せんとする高塔を一夜にして打くづさんと爲し玉ふは君の賢慮にも似合ひ申さずラブサート殿の事は深く之を秘くし畢うせなば何にも差支へは候まじ最早今日と相成ては他に致し方も候まじ何卒氣を朗らかにし望を更らに確しかにして御鬱散ありたしと諫言す、レスター侯は悲しむべし此の利巧慘逆あるバーチーに迷はされて良心の光り照らんとしては復た曇もり功名の心消へんとしては復た輝やぎ浮々として其の言ふがまゝとは成りぬ、然しバーチー彼の宴會にラブサートを出せとの陛下の御意は之れ差當りての大困難なり右は何如にかすべきと打ち案ぜらるゝにバーチーは事も無げに打笑らひ之に付ては一策の候へども今夜は餘程に御疲れ遊ばし候はん明日また申上ぐべしとて退き行きぬ、レスター侯則ち小さき箱より鍵を取出しドン帳を拂らつて暗黒裏の戶前に當て一扭すればサッと音して强戶開きたりアラスコ先生と呼ぶ聲に應じて靜々と出で來る異形の人あり頭髮鬚髯みな白ろく丈高く骨つよく堂々として威風あり眼光先づ光り沈默として席に就きぬ。

レスター侯之に向ひて云ふ汝はわが反對者は重病に罹り必らず近日の中に死すべしと預言したるに今日御殿に於いて正さに之に對面したる所ろ眞に壯健に見へたり汝の預言斯く迄でに信ず可らずば最早此后は何事をも聞くまじと怨言さるゝに老人沈着として私は前方より必らず其人が死すべしとは申さず只た天の成行を考へて之に重病あるべし殆んど一命も覺束なかるべしと述べたるまでにてありき然し若し最初より當人の名前をだも明かに承知いたせしならば亦た考へようも之れ有りしならん何さま之も承はらずして預言したるとなるに其預言の大躰は正さに相ひ當れるには候はずや御思案ありたし昨日來塔の上に在つて謹んで天文を観測するに閣下の運命特の外に宜し必らず大幸福の候はんよう天眼鏡上に現はれ候と云ふ、然らば何如なる名稱の位ひとなるべきにやと問へるに、之は明言しがたし然れど位人臣を極めて最大一の地に登らるゝと申す丈けは稍や天機を洩らすの恐れもなく陳述いたし得べくと云へるに、レスター侯突然飛かゝりて之を捕らへ汝ぢ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

敵のまわし者として吾家に入來り甘言を以て我をたぶらかし徒らに余を喜ばせて大に汝の策を爲さんとするかと詰り問ふに、老人驚ろきたる樣子も無く拙者を差して間者と見玉ふとは、昨夜來二十四時間食物もなく夜衣も無くして此の塔の上に押し込められ人聲も聞かず世事を思はず只だ天に燦爛たる星辰を觀て首らをば雲霧の中に突入れ片足をば墓の内に投げ入れたる老翁が今に於て何よしに虚言を申さうべきやお考へあるべし、拙者つらく閣下の相を思ふに閣下に既に大幸の運あらんとして同時に亦た大不幸の前兆あり即はち「或る少年等の事によりて御身の上に災を生ぜん而して其の災は西方より來る」が如したゞ之を御用心あれと申上るのみが老人の眞心なりと云ふに、レスター侯切りに打案じ彼のラレーもトレッセリアンも皆な西方の人あり此の老人昨日來の出來事を毛髮も存ぜずして斯く迄でに申すと確かに一と通りの僞はりにはあらずと考へ急に笑顔を造りて捕へたる手を放ち此は只だ汝の忠心を試むる迄でに申したるとなり兼てパーチーにも言ひ付け置きぬ能く吾に忠勤せば報賞莫大ならんゆめく怠ると勿れ早や彼方に行て食事せよと言はるゝにぞ老人侯の手に接吻し一拜して出で行きたり。

食堂の此方に來ればパーチー之を待ち受け密かに誘なひて二重戸のあなたに連れ行き聲を密めて、先刻塔の下より合圖して傳へたる事件相分りしやと云ふに、左樣大畧を承知いたしたれば則はち其樣に心得て甘まく侯に申置たり、主人は疑惑の樣子なかりしや、一たんは大ひに疑ひしようありしが後ちには全く悟られし風なりき、パーチー莞爾として主人を欺むくも必竟は主人を思ふが爲めなり彼れ十分に吾等の欺きに罹らば即はち彼の大幸ならん扨てアラスコ汝ぢすでに此れ丈けの役を仕遂げたれば最早去るべしと云ふに、老人怨めし相に見遣りて近來君達に追使はれて肝腎の煉金試驗も出來ず而して今ま用が濟みしとて輕々しく追遣られては大困却いたすと怨ずるに、パーチー冷笑ひて汝ぢ早く此地を去らずバ當時サッセックス方にて連りに彼の藥種屋を詮索し彼の藥を賣りたるものを索むると云へば此に長滯留せんは汝ぢの災はひと成るべし余れ汝ぢを一老人の許に誘ふべし其方の煉金術を施さば彼の老人悉く金に化はり相ありと戯むるゝに、アラスコ怫然として私の術を左樣に輕ろしめられては不平で御座る万國内に私し如き煉金術士は六人とは候ふまじと、言せも果てずパーチー大ひに笑らひ汝ぢ其の術が上手ゆへに其の上手な

る術にて自身が欺むかれて居るにはあらずや先達て頼んでサッセックスに賣込んだ藥のキヽメは何如だ今までピン／＼として丈夫に成つたるに之にても汝の術が巧みであると申されようや彼れ程の事ならば此のパーチーにも出來ると輕蔑すればアラスコ切りに口惜しがり否な之は私の術が拙なきにあらすしてサッセックス侯の運が善かつた故なり先達て盛つたる藥の毒を消すには只だ一品の消解劑あるのみにて之を知れるものは今ま世上に在りとも思へず而も此の解劑を求るとだに甚はだ六かしきものを何如にして彼れが本復したるや甚はだ不思儀にて今に自分にも分り申さぬと不審がればパーチー故意に怒る爲もして汝ぢ此のパーチーを何と思ふやレスター侯の前にては其樣な欺きも言はるべし此のパーチーは中々左樣の甘言を食ふものではないぞ………

佳傳

⊙ワルウイック女の金言　*Lady Warwick.*

本號には寄書欄内に長文の假紀あれば玆には只だワルウイック女の金言數條のみを掲ぐ

大凡の基督教信者は實に不幸なる人々かな彼等は宗教の故を以て世人に惡まるゝには十分なりと雖も奉教の故を以て神に愛せらるゝには未だ十分ならざればなり。

何時にても爾を幸にするものは始終爾を幸にするものなり。

オヽ神ヨ爾は妾か全身を爾に捧ぐるにあらざれは何如なるものを捧ぐるも爾は喜び玉はず妾も亦爾が爾を妾に與ふるにあらざれは何如なるものを玉ふも滿足する能わず。

オヽ主ヨ爾は謙者を祝し玉ふ願くは妾を祝して謙遜を與へ玉へ。

我等クリストの十字架を思ひ見る時クリストが十字架に結び付けられ玉ひし如く密にクリストに結び付くべし。

我等クリストを尊むる程其榮彌增りて其面被愈深し。

日に手に水を要する如く心に血をを要す。

クリストの十字架を喜ばんものは恰かも鳥の翼を着け舟の帆を張るが如くろれこれを負ふ。

キリストの名の爲に誹らるゝ聲を聞は頌贊の聲を聞が如し。

憂の重き所に罪は輕ろし。

罪は世界に死を持ち來たせり然れば世界より罪を携へ去らんものは死の外にあるなし。

讒言を防ぐ善き楯は人々の其言を信せぬやう常々の行を愼しむことなり。

悪に報する時は罪人を處するが如く過を宥すときは皇子の人を惠むが如くあれ。

何故に我等は叫を以て始まり嘆を以て終る此世の生を斯慕や

寄書

○佐々木やす子の履歴

左は肥筑日報にも掲げられたるものにて蠶業熱心なる女丈夫の傳なりとて同地方の社友より送附あり因て左に載す

佐々木家壽子其夫を佐々木種護といふ家世々製蠟を以て業となす福岡縣筑後國御原郡本郷町の豪商なり明治十三年養蠶に志す爾來計畫頗ぶる鋭敏同年二寸餘に成長したる麥作を鋤去り桑園六反歩を開けり當時人皆な驚ざる者なし此年下男與一郎を上座郡三奈木月恒社に遣し桑園の仕立方より培養法等を傳習せしむ同十五年春蠶卵五枚を養ふ大に結果を得たり此年秋蠶室を新造す間口四間奥行八間冬桑園を開拓すると一町歩の多きに及ぶ同十六年春蠶種を奥州より下し大に蠶兒を飼ひしに悉く失敗す種護曰く余十年間を以て一期となし此一期を以て實地經驗中となす當初より收穫を望むべけんや直に豐前彦山に趣き貯蓄蠶種を購求し再び春蠶を飼ふ又大敗す蠶婦落膽手足を措く處を知らず夜中辭なく歸る者あり種護夫婦泰然動かず曰く望む處數年の後にあり成ば則ち今日の失敗を償はん捨る者は金なり得る者は經驗なり余が家幸に父祖の惠厚し數年連敗を取るも決して生計を損せざるなりと又夏蠶紙若干を飼ふ大に結果を得たり蠶婦の喜こび曩日の憂を忘るに至る種護夫婦僥倖と爲し敢て別に喜色なし又秋蠶種若干を飼育す親戚朋友大に勞働の過度なるを諫む種護曰く人生五十余今既に三分の二を過ぐ然るに毎年一度蠶兒を養ふときは終身該業の濫奥を極むると能はず雇婦亦業務に熟練するの期なし蠶婦の勞は余金力を以て償はん余は以て樂みとなす疲るゝを知ず幸に荊妻の內助あり親戚朋友に用なしと秋收亦可なり明治十四年より仝十六年に至る三ヶ年間桑苗を培養し無代價を以て村民に給與し蠶紙を上國に購求して近傍有志家に配付す常に價を求めず種護同十六年鹿兒島に於て開設する九州沖繩諸縣共進會に臨み大に奮發興起する處あり曰く九州聯合せされば海外に向ひ九州生糸の信用を博すると能はずと歸縣後同業者の大會を企て檄を兩筑に飛す此に於てか兩筑の有志多くは其臨會の途に就かんとす豈計らんや期に先だつと二日俄然病に罹り溘然として逝く諸方の有志訃音を聞痛惜せざる者なし家

壽子は慟哭殆んと狂するが如しと其後家壽子病多く屢々死に瀕す因て親戚の者相會し計畫を減縮せんとを勸むる者あり舊業に復せんとを説者あり家壽子泰然動かず益々桑園を培養せしめ仝十七年春蠶を飼ひ頗ぶる結果を得たり先に奬勵せし處の者今經驗上大に得る處あり製絲業を起さんとを欲し來りて保助を求む家壽子欣喜措く處を知ず直に私財を擲ち製糸場を設け機械一切を新調し雜費を貸し爲換金を附與し勸奬到らずと云ふとなし當時養蠶の結果充分ならず製絲の價値貴からず近村の有志家大糸を製し博多販賣の用に供し姦商の手に陷ひる者比々、皆是なり桑園荒蕪殆んど堀り倒すに至る家壽子曰く荒蕪に屬する處の桑園素と亡夫種護の勸奬する處なり堀倒す處の桑樹は元亡夫種護の配付する處なり然るに今斯の如しと悲痛交々至る是より先き家壽子外國直輸を勸奬す人皆な疑ふて隨はず家壽子曰く衆心合すると能はず獨り我心の疑ひなきに盟ふに如かずと春夏の交繭卅一石六斗を購求し之を製し。久留米厚生社に聯合し横濱同伸會社に依囑し米國直輸出を爲し大に利益を博するに至る是れ即ち成章社再興の元素なり豈毅然たる女丈夫にあらずや家壽子此に於てや製絲に係はる一切の費用より賣上に至るまでの總勘定を明記し之を先の成章社々員に示し該社の再興を謀るに靡然として應ぜざる者なし明治二十年春山本、御井、夜須、御原、那珂五郡有志家集會定約したる聯合製糸規約は即ち其結果なり當時佐々木製絲場の盛なると其集むる處の繭は百石工女五六十名を有せり人皆な家壽子の愛國心を感賞せざるなし家壽子或日人に語りて曰く妾は利の爲にするなり夫れ苗に肥料を與へざれば充分の收穫を見ると能はず今農家疲る安んぞ充分の收穫を得んや故に私財を擲ちて之に肥料を與ふるなり今日之を捨て明日之を得る利の爲にあらずして何ぞや高利を貪り金を貸し小作米を督責して倉庫に充つ是怨恩の城郭を築くなり人を苦しめて己を利す一時の安を謀るも安んぞ永遠の樂みを得んや云々佐々木氏所有地百五十町歩以上に及ぶ農家其德に服し未だ法廷を煩はしたるとなしと當業者は必らず知るならん福岡共進會集談會中黒髮を切りたる婦人が衆多男子と共に議席に就き泰然たる者は即ち佐々木家壽子其人なりア、家壽子の風を聞く者頑夫も廉に惰夫も志を立るあらん九州地方製絲場尠なからずとせず皆な士族授産金或は勸業資金に成立つものなり尙ほ且つ事業の爲に消費する少なふして役員の給料等に消費するもの多し或は勢力上の爲にするものあり或は口腹の爲にするものあ

り或は身を官海に投するの楷梯となす者あり是等の人をして佐々木家壽子に對照すれば其差隔豈唯天淵のみならざるなり。

○○哭妹。 川上柳外稿

東風無頼嫉韶華。吹折柔枝似蛋樹。愁色空留衣上涙。幻容乍失鏡中花。泉臺月黑埋香骨。妝閣雨沾渦彩霞。昨夜分明燈下夢。茶園看汝擷新芽。

菊地三溪日。語艷而意慘。一讀爽然。使人酸鼻。

提靜齋日。悽愴之氣。哀痛之語。不勝多讀。

○○姉妹小祥。疊悼亡詩韻。 仝人

韶光警過付長嗟。心緒紛々亂似麻。一掬淋漓胸裡涙。九原髣髴夢中花。魂寒新柳留殘月。愁透前山鎖暮霞。忍看春風墳下路。芊綿芳草自抽芽。

森鷗村日。句々凄切。一字一涙。

片山冲堂日。語自肺肝出。眞是眞詩。又云。一讀使人感泣。

○文苑 （其二） 鈴木弘恭大人撰

夕雲雀 浦 くす子

のどかなる霞とゝもに立つひばり落るも見えぬ夕ぐれのそら

野外梅 太田須賀子

うれしくも澤田の若なつみにきてかたへにかをる梅をみる哉

久しく逢ざる友人のもとへ 廣瀬すゑ子

梢の花も匂ひいでゝ霞みわたれるやよひの空のいとのどかになりもて行くをいかゞへながめさせ給ふらん去年の春ハ都にありて花を見煕さゝにと打つれ立てものし侍りしを今は八重の浪路に隔てられて雁のつかひも心にまかせずいとなつかしうのみ思給るをきみにもみやこの春をいかにしのばせ給ふらむ朝夕のおきふしにもうちたえし音信のいとうさにつたなきふでながら御けしき伺ひ侍るになんあなかしこ。

同 高原うめ子

月日をへだつれど變らぬハ友どちの情とこそうけ給り侍れされどみたてまつらねば何となうものうきとにこそさはしも學のわざにのみ心をくるしめ給ひそ御いとまもあらそかやが軒ばにも立よらせたまへや今ハ花鳥のいろねもよきをりからなにとなう心に待たれはべるになむ。

同 原田 清子

久しう打絶てみけしきもうけたまへらずおぼつかなき月日のみ多くつもりたるをおんわたりにはいかゝおはしますらん承らまほしうなんわらハも例のごと侍れそみ心やすうおぼしたまひてよさて此の頃ハ空のけしきもいとのどかなれば昨日は梅見今日は櫻さゝにと人々にうながされていとまもはべらぬをあさてはうんどうがてらみどりか岡のほとりに若草つみにとおもひ立はべれば同じみ心にもおはしまさばとておどろかしまつるになむ。

●新報（この欄内自由に轉載を許す）

○婦人矯風雜誌と反省會雜誌

夙に報道したる婦人矯風會雜誌は彌よ去十四日に其第一號を發兌したり其の編輯者は即ハち女學雜誌の編者たる吾人なれば義に於て茲に言あるべからざるものなれとも之は元來新聞條例の制限する所ろと爲りて止を得ず吾人が其署名の任に當りたる迄にて編輯上一切の盡力は東京婦人矯風會編輯委員淺井柞佐々木豐壽兩女史に因れるものなるが故に吾人は其功の沒せんとを恐れて敢て之を廣告すべし蓋には婦人衛生會及び婦人教會等より雜誌の發兌せらるゝあり今ま亦た此の一雜誌を得たり吾が女流社會漸やく將に實力の權を握らんとす吾人の慶賀何ものか加へん謹んで之を感謝すべきのみ也。而して彼の佛徒の手に成れる反省會雜誌（即ち禁酒進德を目的とする佛徒協會の雜誌）も本月發兌の第五號より更らに多少の改良せられたる所あるを認め特に其社說として掲げられたる青年佛教徒思想の光景と云へる一篇の如き眞に同雜誌篇者の誠實なる目的を窺ひ知るに足る」吾人ハ暗々たる吾が日本帝國の道德界近來にハかに大ひに光輝を發せんとするの徴候甚ハだ多きを見て藹然拜謝上帝の吾國を棄て玉ハざるを感謝して止まざるもの也。

○大日本風俗改良會々誌

此會の起れるも其會誌の出版せられたるも亦た同樣に感謝すべきことなり其會々則十二條の中ヨ左の如き數條あり

第一條　本會は我國同胞有志と共に從來の舊慣を改革し弊風を矯正し廣く萬國の良風を採り洽く社會の遺俗を作興し以て益々文明の極位に達せんとを目的とす

第四條　大日本風俗改良會誌（大本三十ページ內外）を毎月一回定期發行し無代價にて會員に頒つ○會員は毎會誌發行前に遞送郵券一回分一錢を送附すべし

第五條　本會費用（會誌發行、演說開會費ハ勿論其他總て百般の費用）は本會主唱者之を負擔す

之に由て此會の希望を知るべし會は大坂府南區安堂寺町通三丁目卅一番地に在りて幹事土肥助一郎氏の熱心によりて會歩漸やく運動するが如く紙上にて推察せらる吾人は如此き善美なる目的を有する會合に向て凡ろ正義を慕ふ君子等が多く其贊成を表せられんとを望むもの也。

○皇后宮へ參內　有栖川三品親王の御息所及び高木兼寬氏の夫人其他の二三の夫人方が去十三日午後より皇后宮へ參內ありて拜謁の上東京慈惠院の實況を具奏せられしと云ふ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○國風音樂會　華族女學校の箏曲教師なる熊本縣人高野茂氏は國風音樂會と云ふを設け來る廿五日芝公園第六十一號にて開會する由

○春風會　兼て噂さありたる春風會と云へるは此度貴婦人方の感情を高尙ならしめんとを目的として文學音樂の二科を教授するとに定め尙ほ文學を純粹文學と修身學の二種に分ち又た音樂を唱歌オルガンの二部に分ち月水金の三曜日午后四時より九段坂下統計學校内にて教授する由會主は宮川保全氏にして教師は大和田建樹、野口保興、上眞行、奧好義、辻則承の諸氏なるよし女流に美術志想を養ふ方便の追々と增加するは喜ぶべき事なり。

○美術學校の教諭　文部省にて去十二日橋本雅邦、加納鐵哉、狩野芳崖、長沼守敬、結城正明、竹内久一の諸氏に美術學校教諭を命せられたり。

○赤十字社　有栖川宮小松宮の兩御息所及び華族諸氏の夫人令孃は去十日午後より赤十字社病院に集會し看護上の講談を聽き及び實地看護をも一覽されたる由。

○婦人英語會　高等女學校の教員其他の有志者が今度婦人英語會なるものを新設し去る十日其初會を開きたり

○女子の傳道師　築地新榮町の女子傳道學校に於ては去る三日第一回卒業生徒の證書授與式を執行したりしとを曾て記載せしが其卒業生徒には傳道師の任を授け各地へ派遣なさしむると云ふ。

○婦人懇親會　婦人の交際親睦を厚ふし又婦人の前途に就いて相談をなさんとて明廿二日午後一時より中洲一瓢亭に於て婦人懇親會を開き有志者は男女に限らず何人にも參會して宜ろしとの事發起人は市川かめ子武久さい子其外數人なり。

○演藝改良會　は澁澤榮一太田實其他諸氏の盡力にて愈々會社の組織となし日本橋區蠣売町三丁目の三河侯の邸園に一大劇塲を新設する筈なりと云ふ。

○大日本綸書協會　今度中澤泰茂、中村太八郎、瀧川守郎等諸氏の發起にて京橋區南佃居町十番地へ大日本綸書協會なるものを設け綸書に關する雜誌を發行すると云ふ。

○高知英和女學校　今校は曾て設立出願の處此程許可になりし由なるが科目へ英漢數の三種にして教員には米國婦人ダウド孃スターリング孃本邦人數名なりと。

●海外女報

○黑奴の娘醫博士と爲る　此頃米國にて醫學博士の號を得たるソルリーア夫人と云へるはギアナの或る黑人の娘めなる由。

○倫敦女職工の寄宿舍　倫敦には女職工の寄宿の便利の爲め府内の八ヶ處に下宿屋を建てたるものあり千八百七十八年來即ち此の十年の間だに都合八千人を寄宿せしめたる割にて昨年一ヶ年丈けの統計によれば凡そ一千八百二十四人ありて其職業の種類は八十二なりき食料は一週に四シルリング六ペンス（一圓餘）寄宿料は二シルリング六ペンス（六十錢餘）より四シルリング（一圓餘）なり而して同宿人は一週に二錢つゝ貯金して病氣の折の用に備へ即ち之を出し居るものは疾病の際藥を無代にて受け其外色々の便利を受るものなり。

○子供のはなし

忠實なる家來

或る國の王病最と篤く見へける時丈次と名づく忠實ある臣を召し玉ひ「我も今回は本復致し難からん付ては爾が忠實を見込て賴み置たき事ありそは我子の身の上なり彼はまだ年も邁けねば了見も付かず甚た心もとなし彼を爾に賴み置く程に善きに導き敎へたべ」と申されました丈次は頭を地に付「難有き御命委細畏まり候不肖なる私なれど生命をもて若君を保護し忠實に事へ奉らん」と答へました王は大に喜び「されば吾も心おきなく此世を去るべし吾死せし後爾彼を導きて我か王城を見せしめよ只長廊下に側ひたる奥の一間のみ彼に見せしめな彼處には絶世の美人黄金城の姫君が肖像の有ればもし彼これを見は忽ち戀慕の情を起し遂に危難に逢ふに至らんゆへ暮々も愼しむべし」と言ひ遺しまして無き人とありました其後暫くいたしまして丈次は若君に王の遺言の程を傳へ最と忠實に事へ又其遺言に從ひまして若君を導き王城の各室を巡覽いたしましたに只彼の一室のみ殘しおきましたを若君は不思議に思ひ開けてくれよと申しましたに丈次は彼處に恐るべき品があるから開けませぬといふ開けぬと云へは愈開けて見たく是非

にと云ふを茲處は父君の遺言に決して開けなと申されましたから開ける事はなりませぬと云へとも聞かぬ若君はされは我心は何時までも安からず爾かこれを聞くまて茲處に待つべしと云ふものから致し方なく重き心を持ちまして其戸を開けますと向の壁に肖像かあるアレ見せまじと丈次は躰を延しまして其前に立ちましたなれと其寫は餘りに美しくありましたから若君の目に止りアレは誰の像かと問はれて致し方なくコレは黄金城の姫君でありますと答へましたが若君は忽ち慕はしとの心を起し如何にもして彼を妻とし見まほしと殆んと狂氣の如くなりました丈次はいかにせば可からんかと暫く考へまして一つの策を見出しましたソコテ若君に申し上げ國中の鍛冶屋を招き金銀をもて種々の遊道具を作りましてこれを船に積み二人共に商賈人の風に身をやつし黄金城へと向ました。其所へ着きますと丈次は若君に私はこれより城に入り込み姫君を伴ひ歸る程に御身は船に止まりて諸品を立派に並へ待ち玉へとて一荷の荷を擔ひて王城に上り裏門より這りましたにフト宮女に見付られましたコレ却りて幸と金の指環金の首飾等眼につく品々を見せましたに宮女は頻りに面白がり姫君が見玉はば定めて喜ひ玉んイザ來たまへと宮女に導かれ姫の御殿へ參りまして其品々を見せサテ云ふやう私は或る豪商の僕にて今日は僅かの品のみ持參仕りしにおん目に留まりてろこよなき仕合何彼處の濱に主人は船を守りて候が別に價高く珍らしき品も數多これあり候といへは姫は頻りと見まほしと思ひ其主人を呼ひ其品を持ち來れと命せしに丈次はされば候主人を呼ひ候事は安き事なれと其品を一々持ち來たすには數十日もかゝり又これを並へ申す場所に殆んと困じ候と言ひ畢らざるに姫君はされば己れ自ら行きて見ん苦しからずやとの玉ふ丈次は我術成れりと喜ひ難有き限りに候イザこれよりおん共仕らんと申しければ姫君は二三の侍女を從へ其船へ至り見ますに美しき物珍しき物數限りもなく最と面白げに一々これを見て時の移るも知らざりしが其間に丈次は水夫に命じて滿月に帆を張り艪を並へてこぐ程に舟の行く矢の如し姫は漸く見終りて再び來らんと別を告け立ち出づれは船は既に大洋の中に在りて我城何所とも見へざれば始めてろの欺かるゝを知りドット其塲に泯き沈みしに若君は急に上衣を脱ぎて元の皇子の姿となり泣く姫君を抱き上げ姫の肖像を見しより姫を得んと思を起し斯く謀ひしなりと話し聞かせば姫は一には驚き一には喜び遂に心を得て共に其國さして歸りける。(未完)

廣告

交詢案內

●雇はれたき方（乙）

一　敎師　師範學校女子部の卒業生にして府下の何方へか敎授に行きたきものあり

二　畵師　洋畵の女敎師となり得るものあり廿歲前後時間多らずば女學校の敎師となりたし

三　奉公　年頃廿一裁縫及家庭の事を知る爲め無月給にて府下にて可成基督敎信徒の家へ雇へれたきものあり漢學英學も少し出來るなり

六　奉公　地方師範學校卒業生にて學資に困むに就ては可成西洋人宅にて兩人協力勉學旁雇へれたき二娘あり無給にて何地にてもよろし

七　裁縫　年齡廿三にして家內の手助けとならんが爲め內職に裁縫に雇へれ度き者あり華族樣か町家ならば大家のかたき內にて築地邊ならむ通いても宜しとのこと其他ハンケチーフのふち縫の如きにても宜し

八　敎師　地方女子師範學校卒業生にて敎育に從事し居し者東京にて四五時間は敎育をなし餘は自分の勉强時間と定め八圓より十圓までにて雇はれたきものあり尤も洋人の居る處ならば何處にても宜し

九　奉公　東京高等女學校卒業生にして英學を修めんとすれども學資に乏しく依て己れを糊する丈にて西洋人若くは貴婦人方の左右にありて小間使となり傍ら勉强したきものあり

●喜びのめぐみ

一　乙第五號は本鄕某女學校と相談まとまりたり

二　乙第四號は深川冬木町の某と相談まとまりたり

●**六合雜誌** 第八十八號四月十六日發行一冊定價十錢半年五十五錢一年一圓

全國無遞送料○目次○美術と宗敎　大西祝○優勝劣敗の說　フルベッキ○四福音の由來　宮川經輝○現時の學術上より聖書の創世記を論ず○日本神學の方針上　小崎弘道○勞働上の進步　ラルチット○日本今後ノ傳道ニ付一二ノ鄙見　伊勢時雄●雜記○社會改良論○政敎新論序○日本人○社告○廣告

發行所 東京京橋區日吉町二十番地 **警醒社**

○聖書之友月報 第四號四月廿一日發兌（郵稅共二錢）

●米國フヒラデルフヒヤ府。獨立堂にある自由の鐘の圖
●兒童のため　吾が父の家
●婦人のため　實際の考案　第一
外國の衣裳を用ふるに伴ふ危險（●外國の一貴婦人識）
●聖書につきて　五月中每日曜日課の解說
●万國に於ける聖書の勝利
●聖書之友　吾々の聖書
●論說　聖書の價格（判事イエスト氏）
●雜報　●報告　●廣告

●**懸賞問題** 如何にせば日本人をして聖書に利害を置かしむべきや

一等賞十圓　二等五圓
右詳細の規則。判者の姓名は月報第四號にあり

●**本號には無言の聖書と附錄す**と

東京赤坂氷川町五番地
聖書之友事務所

春期 京濱婦人一致大祈禱會

本月廿八日即第四土曜日横濱居留地百六十七番海岸會堂ニ於テ開會ス。午前ハ九時ヨリ十二時迄午後二時ヨリ四時迄祈禱趣意信仰。京濱其他近地諸婦御臨席アランコトヲ希フ

廿一年四月

京濱婦人一致大祈禱會委員

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

小生日々女學雜誌社明治女學校の間だに往來致し每々來訪諸君の光來に接するとを得ず甚だ失禮と存じ候に付此度左の如く略規相定め置候間右御承知の上來駕を辱せば幸甚に候

女學雜誌社々務に關する事件は社員に御談じ被下度尙ほ小生直面接可申上儀に候はゞ土曜日午後三時より七時迄の間に來社を請度候事

明治女學校々務に關する事件は同校幹事に御談じ被下度尙ほ小生直面接可申上儀に候はゞ每日午後六時より七時迄の間に來校を請度候事

辱知諸君

巖本善治

定期試驗相濟候に付欠員有之の級に限り新入生徒入校を許す

東京飯田町三丁目卅二番地　明治女學校

齊家之秘訣

禁酒美談

全壹冊　定價金七錢　郵税金四錢

人間眞正ノ幸福ヲ奪ヒ社會ニ害毒ヲ流スモノ未ダ飲酒ノ惡弊ヨリ甚シキハナシ心アル者常ニ慨歎憂慮シテ措カザル所也本書ハ歐米諸國ニ於テ飲酒ヲ禁ジ或ハ家ヲ興シ或ハ名ヲ揚ゲ惡漢ハ變ジテ良民トナリ惰夫ハ化シテ勤勉ノ士ト爲リシガ如キ事實ト飲酒ヨリ生ズル惡結果トヲ擧ゲテ一讀其禍福利害ノアル所ヲ知ラシムルノ良書也江湖ノ諸彥幸ニ購讀シ玉ハンコヲ

發兌　東京々橋區三十間堀二丁目二番地　江藤書店

發兌

四月。	七日	十四日	廿一日	廿八日	
五月。	五日	十二日	十九日	廿六日	
六月。	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
七月。	七日	十四日	廿一日	廿八日	

定價

一册。五錢　郵税。一錢（但府内無郵税）
十册。四十八錢郵税。十錢（同前）
半年分　一圓十七錢　府外は　一圓四十三錢
一年分　二圓卅四錢　府外は　二圓八十六錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

一行　一回（廿七字詰）前金拾錢
同　三回以上　一割引
同　六回以上　二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町鍛々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町良明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文春堂○横濱住吉町角田晃貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入淨集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボ！ド○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彥根西内大工町新々堂○相州小田原緑町石春堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十一年四月十九日印刷
明治二十一年四月廿一日出版

發行所　東京京橋區日吉町八番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　東京京橋區日吉町八番地寄留　巖本善治

印刷　東京下谷區仲徒町三丁目七十一番地　森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.

Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY